

大人が絵本を 第36回 絵本に



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

おむつのCMを絵本は語る！

朝から晩まで赤ちゃんと二人きり、授乳と抱っことおむつ換えに追われる一日で、母親が疲弊していくストーリーの、おむつのCMが今春、ネット炎上しました。「ワンオペ育児を美化するもの?」「記憶がフラッシュバックして辛い」と議論は続いています。

子どもたちを自立と成長へと導く「行きて帰し物語」の裏には、母親の存在がありましたが、父親はどうでしょう。お母さんは声の登場だけで、姿を見せない『かいじゅうたちのいるところ』には、当然、お父さんも現れませんけれど、母親の叱る言葉があっても、父親の声はありません。『はじめてのおつかい』では、街中に男性がいても、家の中やおつかいのお迎えに、お父さんの姿はありません。

父親が登場する『ヘンゼルとグレーテル』は、家計の暮らしを維持させるため、子どもを森に捨てようとする継母の提案に従うどころか、置き去りにする森へ父も同行するのです。この不幸な物語の発端は父親にあるという松居友氏は、その理由を「父親の優柔不断と頼りなさ、家庭における存在感のなさにある」と言い、「こうした家庭の状況は父親の存在感の薄い現代の日本の家庭にそっくり当てはまるような気がしてならない」と懸念しています¹⁾。1999年の昔話論から、20年近くたった「現代」の家族関係はどうでしょう。おむつのCMでわかります。

存在感の薄い父親は「企業戦士」

存在感の薄い現代の日本の父親に例えられたのは、『ヘンゼルとグレーテル』ですが、『かいじゅうたちのいるところ』と『はじめてのおつかい』にも同じ見方ができます。おつかいのシーンは、平日昼間

の出来事と思われませんが、子どもの成長の瞬間を父親のいる日に、両親そろって見届けることを設定しなかった父と母に、「男は仕事、女は家庭を守る」とした性的役割分業の社会背景がうかがえます。『はじめてのおつかい』が発行された1976年の、わが国の就業者一人平均年間総実労働時間は、2,095時間で長時間労働が当たり前とされていました²⁾。1980年代は諸外国中、ダントツの長時間労働国で、「企業戦士」という流行語も生まれ、日本の男性の働き方が問題となった時代です。

父親の労働時間が長いということは、家庭にいる時間、家族と過ごす時間が短いということで、子どもの寝ている時間帯に帰宅することが働く男性として当たり前とされていました。必然的に、家庭は「母親と子ども」から成る図ができ上がり、父親の存在感が薄くなってしまいうのも当然のことです。そんな時代背景を絵本はそのまま映し出したようで、その形を当時の子どもも大人も違和感なく、現実描写として受け入れていたように思います。それが、2009年には1,714時間を記録しました³⁾。

『おんぶはこりごり』はおもしろいぞ！

1988年の改正労働基準法の施行を契機に労働時間は減り続け、30年前と比べて減少しました。ところが『平成28年版 少子化社会対策白書』を見ると、未だに「子育て世代の男性の長時間労働」が問題視されているのです。週60時間以上の就業が、30~40代では他の年代(全体平均12.9%)に比べて高く、16.0%以上あるのです。また、白書では、6歳未満の子どもを持つ父親の家事関連時間は、1日当たり67分で、先進国中最低の水準です。子育てに費やす時間は、どの国も少なく、アメリカの77分(家事は

手にするときは！

学ぶ父親像

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

178分)が最も多いのですが、それでも日本の育児時間1日当たり39分は、家事に同じく先進国中最低水準です⁴⁾。



『おんぶはこりごり』
アンソニー・ブラウン 作
藤本朝巳 訳(平凡社)



母親が夫を背負い、その父親の背には、さらに2人の子どもが乗り、母は3人の家族を背負っている絵図が表紙の『おんぶはこりごり』は、このタイトルと表紙絵だけで話の内容を伺いとれる方もいるでしょう。母親は、夫と2人の息子の衣食住、生活全般の世話を一手に担っているのですが、何の手伝いもしないうえ、感謝の気持ちも感じられない3人うんざりして、ある日、家出をするのです。

残された父親と息子たちは家事ができずに、次第に家じゅうが汚れ、やがて3人はブタに変身してしまうという、固定的な性別役割分業を風刺した絵本です。いかにも、日本の男性に向けたお話のようですが、これはイギリスの絵本作家・アンソニー・ブラウンの2005年の作品です。



性別役割分業の解消は永遠の課題なの？

『おんぶはこりごり』の日本語版を翻訳した藤本朝巳氏は、絵本の中の絵に名画のもじりを演出することで、登場人物の関係性や心理を表現する手法を用いていると解説しています⁵⁾。母親が出て行っから、男たち3人は食事作りに挑戦するけれど、要領がわからずに「ひどい味」のご飯しか作れないし、台所だけでなく部屋中が散乱して、とうとう「ブタ小屋」のようになってしまいます。そんなシーンの

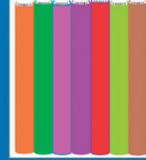
「台所の外にはシュール・レアリスムの画家ルネ・マグリットの名画をもじった夜景」が描写されていることについて、「不安で落ち着かない親子の深層心理を反映するかのよう、非日常な現実が彼らを怯えさせている。ことばでは母親の不在に文句を言っているが、内心は不安なのである。このページの絵は彼らの意識下の本当の気持を描いている」との心理解釈をしています⁵⁾。原作者に直接、創作絵本の話聞き、物語を深めながら日本語のことばを選んで訳した翻訳者だからこそ、見えてくるもの、読み取れることがあるのだと思います。

この絵本を当館男性会員や、ご妙齢の男性客にお見せすると、「耳が痛いなあ」という感想がちらほら聞かれますが、他方、お母様方からは「うちは結構、やってくれるんです」などのコメントがあります。また、当館会員に目立ってきたのが、お父様が抱っこひもを着けて赤ちゃんを抱っこしていたり、寝ていた赤ちゃんが目覚めて泣き出すと、真っ先にあやし始めるのがお父様であったり、お母様が読書の間、お父様がお子様と絵本を楽しんでいる光景も見られるようになりました。ビブリオキッズ・子育て父親デーも不思議とあって、父子だけで来館する家族が重なる週末が、年に数回あります。そのような育児の現場実情を見て、現代の家庭環境は変わってきていると捉えていたところなので、平成28年版白書による実態に驚いてしまいました。社会全体にみると、男性の長時間労働と家事・育児参加度は依然と変わっていないようです。



その家族が暮らしやすいスタイルが一番

性別役割を超えた家族を描いた『ママがおうちにかえてくる!』は、こちらも日本の絵本ではなく、



アメリカで生まれ育ち南仏に暮らす女性作家の2004年の作品です。

一日のうち、同時刻の父親と母親の様子が、見開き2ページの左右にそれぞれ描かれていて、「パパがエプロンつけてご飯の準備を始める」ころ、ママは仕事を終えて家路に向かいます。母親が外で働き、父親が乳児1人を含む3人の子育てと家事を担い、家庭を守っているのです。母親が帰路を急ぐ移動時間の変化に合わせて、家庭にいる父子の活動と、全ページにある「ママがしごとからかえってくる！」のフレーズより、母親の帰りを待ちわびながら家族みんなで協力している様子がかえります。「ママがお家に帰ってきた」ら、家族そろって食卓を囲むのですが、父親が料理中着けていたエプロンは外され、ジャケット姿で椅子に座っています。ラストシーンは、母親がみんなのお皿にピザを取り分けている家族団らの食事風景です。

この絵本について、「その家族が一番暮らしやすいスタイルで、それぞれの役割を分担するという提言は、現代絵本として興味深い」との評価を、日本女子大学家政学部教授の石井光恵氏は述べています⁶⁾。

父親と母親、そして子どもたちが自然体で暮らしている物語は、根底でしっかりとした家族の絆が伝わってくるのです。リズムカルな短い文章とカラフルで明るい絵が、主夫とワーキングマザーのペアを特別なものとしなくて、穏やかな家族の光景として演出しているところに、ひとつの家族のスタイルがあるのではないのでしょうか。



トメク・ボガツキ 絵
ケイト・バンクス 文
木坂 涼 訳

『ママがおうちにかえってくる』(講談社)

同じワーキングマザーの母親をもつ『おんぶはこりごり』の家族とは、絆や信頼関係、家庭の幸福感など、伝わってくるものが全く異なります。でも、心

配しないで下さい。家族をおんぶしていた母親も、家庭に「しあわせ」を感じる時が訪れるのですから。

日本の絵本作家の泣きどころ

では、日本の絵本をみてみましょう。

『はじめてのおつかい』で見たとおり、「まだまだ母子の関係が強く、あまり存在感のあるお父さんは見かけません⁷⁾」と鳴門教育大学教授の佐々木宏子氏が問題提起したのは、1983年のことです。父親が企業戦士でしかなかった時代ですから、納得できます。ところが佐々木氏は、10年後の1993年にも「10年たった現在でも、あまり大きな変化がない」との見解を述べ、その要因を「わが国の家庭がまだまだステレオタイプの性別役割によって分断され、父親がほんとうの意味で家族の一員として組みこまれていないところからきている」と指摘しました。そして「父親が、職業人としてどんなにすぐれていようが、それは人間としての役割の一部であり、家庭の中でも豊かに生きることがなければ、わが国の幼児絵本はこれからも、母子だけが活躍する世界でありつづけるでしょう」と指し示しています⁷⁾。

さらに、2001年に佐々木氏が発表した絵本の心理学的分析研究で、「父親が子どもと意識的に正面から向き合うなかで生まれてくる興味深く感動的な絵本は、あまり見当たらない。その内容は微笑ましくはあるのだが、なんとも軽く頼りないのだ」と解説しています⁸⁾。

日本にもいるよ！ カッコイイ父親

佐々木理論である「父親が家族の一員として組み込まれていない」と指摘した要素を見事に覆す絵本があるのです。1980年に発行された、原田泰治作『とうちゃんのトンネル』は、終戦直後の食べるものがない時代に百姓をして生活をするようになった6人家族の物語です。家族のためにもくもくと働き続ける父親の姿は、家族の一人ひとりが父親を尊敬し、後

を追い、だからこそ父親の手助けを家族自ら進んで
行うのです。家族と共に生きる父親、そして父と息
子の強い絆が描かれており、深い感動をよびます。
父親像の理想を描いたこの物語は、作者の実話です。



『とうちゃんのトンネル』
原田泰治 作(ポプラ社)



父親に抱かれた女の子が家の前で、出かけて行く
母親と手を振りあっている絵が表紙の『いってらっ
しゃーい いってきまーす』(神沢利子作、1985)は母
親が会社勤めで、父親は絵描きの家族です。父親は
最初と最後だけの登場ですが、父子で会話をしなが
ら保育園まで自転車で見送る光景に、育児の分担が
わかります。

毎日9時に会社へ行き17時に帰ってくる父親と、
母親、赤ん坊と双子の兄弟の5人の家庭では、母親
が赤ん坊から手を離せないときは、父親が食事を作
りますし、お風呂も子どもと一緒に、兄弟げんかだっ
て治めます。子どもたちが眠ると、夫婦のティータ
イムもあって、子どもとも妻とも向き合うお話は
『パパはまほうつかい』(西山直樹作、1988)です。

6歳の誕生日を迎えた息子に、誕生から歩けるよ
うになるまでの成育過程『ぼくがあかちゃんだった
とき』を膝の上に乗せて語る父親と、息子の対話で
展開されるお話は、父親が積極的に育児を楽しんで
いる様子が満載で、父親の存在感がたっぷりです
(浜田桂子作、2000)。

そして、忘れてならないのが、かこさとし作『から
すのパンやさん』で、朝早く起きてパンを焼くお父さ
んですが、「赤ちゃんが泣きだすと飛んで行ってあや
したり、抱いたりする」のです。父親と母親とが、育
児も仕事も対等な立場にあり、豊かな家庭が描かれ
ています。1973年初版の日本の絵本には、働き者で家
族思いの、存在感あるカッコイイ父親がいるのです。



お父さん、出番ですよ！

絵本の中に印象深い父親が少ないことは、2000年
代前半までの事実ですが、00年後半から存在感ある
父親が現れだします。家事・育児に参加する父親の
物語ではなく、物語の端々でそんな姿が自然体で描
かれた絵本が増加しているのです。当館所蔵の絵本
だけでも冊数は豊富ですが、とびきりの一冊なら、
『海のおっちゃんになったぼく』(2006)でしょう。息
子の行動を諭すように叱って、子どもの心と正面か
ら向き合う威厳ある父親が登場する物語です。

現実では、まだまだ父親の育児時間が短い実態な
のですが、佐々木氏が述べる「家庭の中で豊かに生き
る」父親が少なくとも出現したからこそ、絵本の中で
「母子だけが活躍する世界」を脱却できたのではない
でしょうか。愛着など、どうしても父より母子関係が
強くなるのは当然です。だからこそ、父親が子育てに
少しでもかかわってくれれば、母親は、精神的に安ら
げるものです。夫婦が支えあって自分たちの子ども
を育て合うことで、母親を精神的にサポートするこ
ともまた、夫である父親の役割です。そんな育児環
境を、現実社会と絵本の中で拡散していけたら、父親の
存在感ある日本に変容していけると考えます。

文献

- 1) 松居友：昔話とこころの自立，宝島社，東京，1994，pp.71-96.
- 2) 労働大臣官房統計情報部：毎月勤労統計調査報告（全国調査），No.335，労働大臣官房統計情報部，東京，1977.
- 3) 独立行政法人 労働政策・研究・研修機構：データブック国際労働比較（2017年版），労働政策・研究・研修機構，東京，2017，pp.199-216.
- 4) 内閣府：平成28年版 少子化社会対策白書，日本点字図書館，東京，2016，pp.23-25.
- 5) 藤本朝巳：男性の身勝手と女性の自立（In 中川素子：女と絵本と男），翰林書房，東京，2009，pp.55-62.
- 6) 中川素子：女と絵本と男，翰林書房，東京，2009，p.163.
- 7) 佐々木宏子：新版 絵本と子どものこころ，JULA出版局，東京，1993，pp.240-246.
- 8) 佐々木宏子：絵本は父親をどのように描いているか—心理学的分析試論，絵本学(3)，p.31-40，2001.